針葉樹會報
通卷第八十五號

金剛山紀行

園山生

僕は未だ正體を見たことがないからハッキリは言へないが、光陰といふものは非常に早いものだそうで、そのせいか敬愛する諸君に歡送されてその昔パカンベンカンシンカンシと稱し現在は兵站基地朝鮮と呼ぶ此地に參りましてから早や四ケ月になります。當地では何が自慢だと言つても「內地」程自慢の材料はありませぬ、僕の帽子は內地で買つたんだ、私のハンドバックは東京の三越のよ、この梅干は君これでも內地のだぜ……と言ふ具合。だから僕の自慢は「僕んとこの子供は內地產でれ」とは本當の樣な嘘の話です。

さて皆さん、その後お變りありませんか。今頃の東京も暑いことでせう。當地は今日から小學校の夏休ですが、今まで半月程の間は毎日三十五六度、全く東京なんか叶やしません。そんな所で日曜無し祭日無し、朝八時から午後七時まで勤めてゐる身を考へて御覽なさい。吉澤熊氏の弟御さんが先日來訪されて（この人が京城に於る唯一の知人です）テヘ〳〵ッと呆れて吳れたのですから、推さずとも知れませう。その忙中閑を得て金剛山へ登つて來たのです。金剛山は半島一の靈峯です。皆さんの中で金剛山に登つた方がありますか。增山君如何ですか、針葉樹會員多しと雖もあの壯麗極りなき金剛山に登つた會員があるかどうかお調べ下さい。以下紹介する處は金剛山紀行の一節。

朝鮮の東海岸に沿つて背梁山脈が海近くその山稜を波立たせ、廣袤二十五方里の山域に聖なる神秘の樣相を漾ふるところ、そこに金剛山の豪宏壯麗な大景觀が繰り擴げられてゐるのだそうである。それは近代都市、炎熱の都、京城から鐵路僅かに五時間の近距離にある「萬二千」の層々群立する奇峯峻嶺の大集成である。

土曜日の午後十一時京城驛發の特別列車の○等寢台最上段にハッキル心臟をオルに冷して、ニンニクとワキガと蝿と蚊とピンデー（南京さん）のゲリラ戰に應

酬しつゝあつたのが御承知の僕であつた。半島の汽車はボーともリンとも言はないで始發驛を八分遲れて動き出す。僕の寢てゐる直ぐ下は鮮人のワイフ、その下が米國人の牧師であつて、この二人が朝鮮言葉で二時間も話合つてゐる。一時半に鐵原に着くと我等の寢台車だけを切離して列車は出て行つて了ふ。あたりは森閑さし闇夜で星が眠さうにまたたいてゐる。驛には人も犬も居ないで、ただ寂莫である。そのまゝ眠つてゐたら何時のまにか寢台車は電車に引張られて急な勾配をノロ〳〵と走つてゐた。あたりは漸く白んで鮮農が牛に荷をつけたり煙管を銜にさして顏を洗つたりしてゐるのが見える。午前六時内金剛驛着、バスで長安寺まで行く。金剛山八百寺の第一古刹であり内金剛の入口である。ここから川に沿つて朝鮮松の森林帶を緩かに登つて行くと三十分で表訓寺につく。古い大きな寺で建築にも雅趣があつた。この前の河原で朝飯を食べて歩き初めると直ぐに萬瀑洞である。渓流がたぎり躍り淵をなし瀧となるその連續で、先ず〳〵壯觀と言はればなるまい。鮮人の金持たちが五六組ハイクしてゐる。その連中が景色に見とれ感嘆措能はずで僕に何とか言ふのだが生憎さつぱり通じない。そこで「ナムンマルモラ、ヨボセイヨ」と言つてニヤリと笑ふんであるが、この意味は「私言葉判らないあるよ、あなた」と言ふんである。こんな事を言つてゐる内に四仙橋に着く。これからが愈々急な登りだ。澤は何時のまにか涸れて道はヂグザグになる、岩が兀々として樹木がない。全くの炎天を三尺幅の岩道、石段を喘ぎ喘ぎ昇る。金梯銀梯といふ金剛山式の岩峯が左右にそびへてゐる。四仙橋から四時間で漸く登りつめると其處が金剛山中の最高峯たる毘盧峯（ビロウホウ）一六三八米の頂上だ。見える見える外金剛の山々谷々は眼の下に、日本海は直ぐそこに、内地は遙かに霞んでとは嘘になるが、さにかく良く見える。南方には近く内霧在嶺、望軍台の峯々が西には衆香城水精峯の山々がそれ〴〵頂上に奇巖を飾り胸から下を樹木に包ませて、内地の山と大差なく連り重つてゐる。内地とちがふのは頂上に祠のないことで、ペンキ塗の立札だけとは淋しい氣がする。正午から一時まで頂上に休んで今度は外金剛側に下る。北方に續く尾根を二粁程下つてから道は右に折れて澤を渡り小尾根を乘越すこと三回で九龍淵に着く。ここは恐らく金剛一の惡場で消防署の鐵梯子の樣なので垂直に六十米程下りる場所が二個所ある。道はヤヤコシイ石段でそれが飽きる程に長い。汗を拭き拭き走り下つてゐると遠雷の樣な音がする、見下すと斜左の岩壁から直下する五十七米の九龍瀑が九天九地も裂けよとばかり鳴り落ちてゐるのだ。瀧の上の上の岩壁から瀧壺の先の先まで完全な一枚岩で樹も草もない。夕陽は傾いて瀧の最上部だけが逆光線に照らし出され、それ以下の部分はドギツイ蔭影に區切られて鋭い對照を畫いてゐる。僕の今までに見た瀧は皆んな狹い谷に深く落込んでゐる日本的な瀧であつたが、この九龍瀑は實に廣い。一平方哩はタツプリあらうと思はれる谷に轟々と落ちてゐる。全くの壯觀。

背景の山々は全部が全部鋸嶽の形相で、その峯々が夕陽に映えて或は光り或は燃えるが如く……と形容詞がいくらあつても足りさうもない。茫然として時間を空費してしまつたので、これからはピッチを上げて急ぐ。だから玉流洞と稱する一連の碧潭も一

2

々見てはゐられない。六粁を一時間で走つて神溪寺に着いたのが午後六時。五分待つてバスに乘ると、街道を珠數なぎに腰繩をつけられた鮮人が十幾人か護送されてゐる。これは金剛山に充滿するタングステン礦の盜掘犯人で、背中には山刀や鑿金槌を負つてゐる。どの顏を見ても全くの不逞鮮人で、假に三池に在す〇〇先輩がこれを見たとしたら、ギヤーッと動物的悲鳴を擧げて本性を現すにちがひないさいふ代物だ。彼等は討伐隊が來ると頭に毛布を卷きつけて崖から轉げ落ちて逃ると言ふ。危くなればダイナマイトを警官隊に投付けると言ふ。盜掘の現場に登山者がまぎれて行くと防諜上慘殺してその肉を食つてしまふと言ふ。全く以て不逞の極みであらう。この話をバスの運ちやんに聞いたら身體が涼しくなつて唇が乾いて來た。温井里といふ温泉で夕飯をたべて外金剛驛から八時半の寢台列車に乘り込んだのだが、未だ彼等の顏が眼に浮んで眠れない。本當に凄い顏付だつた。

この日の歩いた距離約三十二粁。普通二日行程を一日で片付けたのだから、往年の猛者も大分にこたへました。スリルを滿喫した金剛山紀行を遙か故國の諸兄に贈る。(七・二一)

祖母山

近藤

現場にはお盆休みと云ふものがある。これに日曜日を結びつけて二日續きにしてくれる、有難き幸なり。同行二人は都合惡く中止となり獨りで出掛ける事にした。

豐肥線玉來(タマライ)驛に下車したのが午後四時過ぎ、それから神原(カウバル)行の小型自動車に乘つて祖山館と云ふ此町唯一の旅館に泊る。先程の自動車の運轉手が此の祖山館の主人であるので吃驚した。

どうも運轉手にしては少々客扱ひが亂暴過ぎると思つて居た處成程と思ひ當つた。然し運賃は頗る安い。約五里の山道が五十錢だ。それに祖山館の泊賃が金壹圓、最近に於けるレコードである。此の旅館で其晩出した芋と蕨と竹の子の煮たものの甘かつた事は一寸忘れられない。芳香美味、膳を蔽つて食欲をそゝり遂に飯を五杯も食つて、われ乍らあきれてしまつた。

朝五時起床、六時半出發だ。

國觀峠の山道を獨り朝露を踏みしめてぶらぶらと登る。實に其の氣持の良い事、そして神原町から一里程谷を遡るとすつかり兩岸が迫つて來て、三段の大瀧にぶつかる。各瀧は十五米突位である。一番上が御社瀧と云ふのだそうだ。此の瀧の側の小路をどんどん登る、三段とも釜があつて嘗つて秩父西澤の釜を思ひ出した。懷しい釜であるが一寸凄いものである。これから八〇〇米突はヒタ登りに登らねばならない。而も鬱蒼たる大森林の中である。名も知らない小鳥が囀つて居るのと、時々頂上の邊りにゴーと云ふ風の音がするきり他は萬物總て沈默である。

鉢卷の手拭を三度も絞つて漸く國觀峠に出た。突!! 豁然たる大平原の彼方、雲海に浮び出たる久住連峰と阿蘇の雄渾なる姿に暫く我を忘れて見入る。昨年八月友一人と久住山頂より此の祖母山を眺めて、來年は登らうと約束した事を思ひ出して感慨の深いものがあつた。

阿蘇山は昨今活動を始めたせいか、黑煙を數哩の彼方に靡かし是を取卷いて外輪の山々が果てし無く續いて居る。

振り返つて見ると、祖母の山頂が濃緑の森に包まれて聳えて居る。今日の山旅の幸なるかな！ 今朝、宿の主人の話に依ると昨日は數百の登山者が久住に登つたそうである。

然るに今私の周圍には誰も居ない。いや、神原の町端れから人の子一人にも會はないのである。何んと云ふ嬉しさであらう。

此の峠から一粁の山頂迄は、私は一歩々々ゆつくりとした足どりで幸福に滿ち足りて登つた。こんな樂しい豊かな山旅は近頃經驗した事が無い。

山頂での一時、是れは駄筆の及ぶ所では無い。これから大障子岩への尾根の縦走となる。此の方は餘り人が通らぬせいか道が實に分りにくい。八丁越え道の山道は變化に滿ちて居て面白い。廣い森の中や痩せた尾根、それは愛鷹山の鋸岳、三枚齒の樣な處、さては一寸ゴルフでも出來そうな處と色々ある。森の山道は、夏と云ふに早や落葉が重り合つてフワ〳〵と足を浮かし、腰を下ろして休めば風も無いのにカサコソと色々の形をした葉が膝の上に降つてくる。

谷間の方からは實に冷めたい風が時々吹き上げて來て、汗に濡れたシャツが冷々と肌に觸れて何んとも云えない氣持である。

八丁越で尾平鑛山への道と合した、道は急に明きりとして來た。山麓の彼方に一軒人家が見える。あれは今朝出た神原だ。

此の奇麗な山道を下る時何時ではなしに私は「紫の雲搖めけば……」を心から口吟んで居た。今は何物にも捉はれない大きい自然の懐に自然の兒となつて、足どりも輕く神原の祖山館へ歸つて來た。

以上

富士遊記

P E N 4

今度十三、四年振りで富士へ行つた。まだ學校にゐる時、吉澤君と秋十月の末頃かに登つた事がある。今度はその「二度登る馬鹿」をやつて見た譯だ。

登りながら考へた。富士山は好い山だなと思つた。但し登る人が無かつたら、そして道も今程好くはなかつたら、早く云へば山が今程開けてゐなかつたらほんとに好い山だと思つた。

例へば鐵道馬車を吉田で捨てて、裾野三里の松林の中を、草の葉末の露をシットリ踏んで草鞋の緒を濡らす。馬返しからあるか無きかの踏跡を辿つて、藪鶯や駒鳥の歌を聞きながら行く。輕く汗ばんだ頰を颯々の谷風に冷して憩ふ。五合目天地の境。去來する狹霧の中をただ見る岩と石塊の中を歩きよさそうな所をひたむきに登る。頂上が手に取る樣に見えて來る。四邊に人影一つ無い。着莫蓙、菅笠、金剛杖。荒野にさまよふ胡蝶の樣に、へうへうと登る——さしたら富士は規模も景觀も日本一と云つても好いだらう。これならば三十三度登山の石を樹てても好い。その點で百年前二百年昔の人達の富士登山は實に羨ましい限りである。

今度行つて見て「人」と云ふものは「山」を荒すより外何もしてゐないものだとツクヅク思つた。

富士が持つ本來の好さとか、人間が山に加へた惡さとか——こんな話は抜きにして、今度始めて見た夏場の富士の話、二つ三つ。

七月二十九日朝六時十八分新宿發。一行六人。その中で親戚の方を交へて初めて山へ登る女の子が三人。

「鳥居室」

急がぬ旅、二合目少し上で昼食をすまして、七合目へ來た時は夕方六時前。まだ明るいが今日は此處で泊ることにする。此處は本七合目と稱し、鳥居が前にあるから呼んで鳥居室。山日記では七合目1に當り和光某の印伴天を着て客を呼ぶ。此の邊では本何合と稱し、正何合と云ひ、新何合目、舊何合目とまるで何とか屋の元祖爭ひの樣だ。

泊りは特別と普通があつて、普通とは板敷の上に莫蓙をしきつめて雜魚寢であり、特別は一間幅に疊を敷いて普通室とは障子で仕切つて普通が雜魚寢なら是は目刺の樣に綺麗に枕を並べる。まだ明るかつたので普通の方は空いてゐたが特別の方は豫約があつてやつと三人丈け空いてゐたのに女の人達を入れて貰ふ。寢る部屋が違ふばかりで一方が一圓八十錢、高いのが二圓四十錢かと思つてゐたら、七時頃持つて來てくれた夕飯が三人のお汁が違つてゐて小さな魚の皿が一皿（三人について）多かつた。

御飯をたべたら疲れてかゞッスリねてしまふ。三時間もした頃に眼がさめて見たらもう室は人で一ぱいで向ふの方はうす暗い灯かげに霞んでボンヤリ見える。山日記に收容百人とあるが聞いたら三百人は泊つてるそうだ。それでもなほ盛んに夜道を登る人に「お泊んなさい」をやつてゐる。雜魚寢とはよく云つたもので一枚の蒲團に例へば東を枕に三人ねると反對に西枕で三人、都合六人それにかけ蒲團が一枚。勿論兩端の二人はかかつてゐるとは名ばかりのかけ方だ。その連中がまた行儀惡く腕を延し、脚を曲げてゐるからまるで疊み鰯の樣だ。

一應、客がれ靜つた十一時頃その踏場もない樣な疊鰯の間を上手に入つて來て一人一人宿泊料をとりたてる。成程慣れたものだ。何しろ夜中十二時頃に出て頂上で御來光を——と云ふ連中が多いのだから朝出かけの混雜の中で御勘定ぢや追付くまい。その頃から騷ぐ人達でオチ〳〵眠られず二時半には出發としたが、その時分には泊り客の殆ど大部分が出かけた後で大分靜かになつてゐた。此の時分から寢ればよかつた。

「頂上」

こんな工合で止むを得ず朝二時半に出發して暗い中を懷中電燈で照しながら行く。その行列は押すな押すなで、見える限りが一本の光の線となつて續く。

雲が高かつたので日の出が遲れて五時半過七合五勺で御來光を拜して、途中道中ゆるやかに、頂上についたのが八時半。七合目から六時間。正に悠揚せまらぬ大記錄だと思ふ。

淺間神社奥の院に詣でてゴッタ返した茶店の前を拔けて火口壁の所に出ると、其處に一ぱい人間がねころんでゐて、その間に罐詰の空罐があつて、その間から火山岩や礫が顏を出してゐると云ふ有樣。此の前吉澤君と來た時は勿論人つ子一人もゐない靜寂なもので大内院の火口にかゝつた氷柱が時々折れて、落ちて、鳴り渡るのが妙に物淋しく聞えた位だつた。だから頂上お鉢廻りはやつたものの、ただ廻つたと云ふ丈けで何が何處にあつたかも知らなかつた。今度はお鉢廻りは面倒だから兎も角劍ヶ峯まで行つて見ようと出かけた。吉田口登りつめて久須志岳。その右へ（西）白山岳。白山岳を登らずに内側の途をたどると金明水に出た。此の

前銀明水は御殿場口下り口で見て覺えてゐたが金明水は記憶がないと思つたら矢張り此處は通つてゐなかつたのだ。高さ一萬尺の峯の頂上に、然も火山岩の間に清水が出ると云ふ有難さに押つかぶせる樣に、白い着物に水色の袴か何かはいて納りかへつてる男の前の机に、徑五寸位の銀製の（或はそれらしき）盃を並べて、なみ〳〵と一ぱい金明水を湛へて善男善女に一金五錢也で飲ませる。それを恭しく三々九度のお盃でも頂く樣に飲んで見ると清冽爽冷。心氣頓に澄んで先づ有難い。お土產物など買ひ調へて、店の隅の方を見ると「マスク」が並べてあつた。寒いから呼吸器の惡い人でも買ふのかなと考へた。そこからお鉢の緣へ出て、大澤を右に見て、それから鐵の梯子を登つたりしてチョコレート色の氣象觀測所の横に出る。

猫の額の樣な劍ヶ峯の頂上で三角點の石を撫でながら見たら二等と刻んであつたので一寸おかしな氣もしたし、又何とはなしにガッカリもした。後で地圖を見たらこれは三角點ではなくて獨立標高點だつたので猶更變な氣持になつた。

「砂　走　り」

頂上を出たのがお昼だつた。銀明水は渇れてただ燒印、スタンプ、お土產物賣場となつてゐる。

御殿場口九合目で一寸休んで草鞋は無いかと聞いたら今年は草鞋をはく人が增えたのかスッカリ無くなりましたと云ふ　女連れの草鞋が心細いので八合目で聞いても無いと云ふ。七合目でもありませんよと答へる。その癖どの小屋にも砂走り草鞋御支度所などと書いてある。六合目砂走りが始まる。どうにか草鞋は間に合つて五合目。此處に來たら妙なものがあつた。底にトタン板を張つて舟形とし眞中に板があつて腰掛となる。中に背負子の小さなものが入つてゐる。正に砂用トボガンである。綱を前に引つぱつて人力車の樣に砂の斜面を走る仕掛である。五合目から二合五勺までが一圓八十錢。大分疲れた二人の女の子に乘つて貰つて、其について走つて見た。相當なスピードである。四合目、三合目と小屋の前を通る時丈けは下りて徒步連絡と云つた形だが二合五勺の終點迄かけこんだ時は全コース十五分位しかかゝつてゐなかつた。

橇はブレーキも何も無いのだから止めようと思ふ時は走つてる男が止まれば、大した急な傾斜でなければ止る。それから考へると走つてる間は相當な力で綱を引つぱつてる譯だ。終點に來ると例の小さな背負子をとり出してトボガンを横に背負ふ。そしてエッチラ、オッチラまた五合目まで登つて行く。夏場の荒稼ぎも樂ぢやなさそうだ。

此處から太郎坊まで馬があり、それから馬返しまでが花月園あたりにある樣な馬車があつたが、どれにも乘らないで砂の中を重い足を引ずりながらバスの乘場に來たのが四時半。其處のお土產品賣場に羊かんや、山葵漬の間にマスクが並べてあつた。そして貼紙に曰く「砂走り用マスク」。

以上

會員通信

○新羅二郎君より（七月十四日附　吉澤一郎君宛）

又暑イ夏ガヤッテ來マシタネ。其後如何デスカ？　オ蔭樣デ元

氣ニヤツテマス。少シハ山ニ登ツタ事ガアルセイカ、辛イ事ニハ耐ヘル自信ガアリマスヨ。PENチヤンガ二度訪問シテ下サイマシタ。屋上ノ物干場カラ時々富士ガ見エマス。Berg Heil モ當分駄目デスネ、兵隊生活モ仲々面白イ事ガアリマスヨ。當分コチラニ居ルラシイデスカラ何時カオメニカ、レルデセウ。

(編者記)新羅君は去る八月十四日芝浦港出帆、〇〇に向つて出征されました。

○小谷部全助君より(八月七日附　編者宛)

今日上高地へ來ました。大天幕にて暑い内滯在する豫定です。今度は携持寢台等使用して頗る工合宜しいです。一度休暇とつて遊びに來ませんか。大阪に居る時は堪らなく暑かつたのに、まるで中秋の氣候です。岳川奥の雪も平年より大分多く殘つて居ります。何れ上高地便り等ものしてお送りしませう。では炎暑の砌御自愛祈上ます。草々。(上高地にて)。

山岳部報告　(六月)

記　錄

(1)甲斐駒、仙丈、鳳凰縱走(六、一四—六、一七)　清水　佐野

入學後最初の高山行。二人共全く山の靈氣に取憑かれた樣に毎日ほつつき歩いた。天候にも惠まれ、内容豐富であつた。

(2)三ツ峠岩登(六、一八)　久保　佐藤

狹い岩場に早稻田の連中と一緒になり混雜振りは猛烈。

(3)前穗高東壁(六、二一—六、二五)　大塚　山田

東壁は松高尾根側から取附く、かなり時間を費やした。夏山も眞近かだといふのにまだ雪の多い事は驚くばかり、夏のキャンプサイトが氣に懸る。

日　誌

○定期部員集會　六月九日　於本科　出席者十名

夏山の計畫を涸澤合宿と決定。第二次計畫は縱走とし後日決定の事。

○定期部員集會　六月二十三日　於本科　出席者全員

第二次計畫決定、直ちにプリントし一般に配布す。

尙今後合宿前まで毎週金曜の集會の外、毎日部室に來たり色々夏山の準備を行ふ事委員より注意あり。

記　錄

○栂池行　森健二　黑田正治

四月二九日　晴　松本(五・〇〇)—大町—森上(一〇・〇〇)—栂池(五・三〇)

期待せる雪案外少く、結局御殿場直下迄スキーを背負ふ。後立の屏風が逆光に輝き、暑さは暑し、オムコさん達あごを出し、成城を栂池と間違へる始末。

四月三〇日　晴　栂池(七・三〇)—乘鞍岳(九・〇〇—九・三〇)—小蓮華岳(一二・〇〇)—白馬岳(一・五〇—二・二〇)—乘鞍岳(四・四〇)—栂池(五・三〇)

乘鞍の天邊迄上つたら、森さんが足にまめが出來たといふので天氣はよし、小屋の奴に約束した手前、一人で出かける。小蓮華の尾根をアイゼル物凄くガチヤ〳〵歩いてると、早稻田の連

中がスキーで直接とつゝき、尾根通し白馬頂上迄行つたので、全くアホラシクなつて來た。でも春陽を滿身に浴び乍ら雪尾根を小諸の一つも口ずさみ乍ら漫歩するのも惡くはあるまい。午後は大分雪崩を聞いたが、大雪渓は未だ割に綺麗であつた。夜半雨降る。

五月一日　晴時々曇　栂池(九・三〇)—森上(一二・四〇—一・四〇)—大町—松本—大阪

夜來の雨も精進のよさ、ぴたりと止む。雨で雪はくさり、小屋は疊むといふので下る。雪を求めて無理して滑つたら結局藪潜りをさせられ、胸をうつたり、澤の中で轉んだり、鼻血を出して見たり、相當忙しく御蔭で十二時半の上りの煙を遙か見送り森上の櫻等賞しつゝバスで大町に至り淺間で一浴の上乾杯し、コをやつて幕。(黑田記)

○丹澤塔ヶ岳　六月四日(日)　小柳二郎

會社の同僚ハイカー二名の御伴をして、第一日曜の喧噪を極めた、云ふ所の丹澤表尾根といふ奴を歩いて參りました。

○大岳山海澤　六月十八日(日)　小柳二郎

海澤も近頃ではハイキング雜誌に略圖入りで案内が載る樣になつてからといふもの、毎日曜の混雜は大したものらしいです。でも大瀧から先の澤筋では人影もずつさまばらになり、どうやら山に入つた樣な氣分が湧いて來ます。平生の精進の御蔭あつてか梅雨どきには珍らしい文字通の日本晴れでした。

○谷川岳(耳二ツ)　七月九日　小柳二郎

今月下旬北アルプスへ入る足馴しを兼ねて久し振りに上越國境附近の尤物に見參せんものと、例によつて登り西黑澤、降り天神峠のコースを歩いて來ました。西黑澤をはじめ殘雪は意外に多く、肩の岩場のところでグリセードの眞似をやつたり、素晴らしい眺望と共に全く惠れた一日の山旅でした。

○穂高涸澤生活　中島孚　黑田正治　小柳二郎

七月二十二日—二十五日(詳細次號)

○王瀧川、木曾御岳　吉澤一郎　村尾金二　望月達夫

八月四日—九日(詳細次號)

○富士山　八月十三日　林俊介

快晴　吉田(后八・〇〇)—馬返—頂上(前一一・〇〇)—御殿場口馬返(二・三〇)—御殿場(三・〇〇)

消息

吉澤一郎君　蒲田區女塚四丁目五一三番地へ轉居。

覺張泰三君　經理部幹部候補生となる。(通信先)仙台市山本部隊及川隊第一班。

新羅二郎君　(通信先)石橋部隊大野部隊第一中隊第三小隊第二分隊。

小谷部全助君　兵庫縣武庫郡芦屋月見ヶ丘、山樂莊内へ轉居。

森川眞三郎君　八月二日父君を失はる。當會よりは幹事代表して參上、御香料を差上げました。謹んで哀悼の意を表します。

定例針葉樹會　八月廿九日(火)　於如水會館

出席者(會員)中川　吉澤　村尾　吉澤松　增山　丸茂　小柳　林　望月(部員)岩崎　船本　宮城　山田　根本　高野